

# 如浄語録を通してみた如浄禪師

高橋 秀 栄

道元禪師が生涯、正師として敬慕された長翁如浄禪師は、いかなる風格を備えた禅僧であつたのか、そしてまた、学人の接化指導に當つていかなる手段を用いられたのであろうか。この点に関しては、すでに道元禪師の遺著の随所に言及され、多くの学者によつて紹介されているところである。しかし、『如浄禪師語録』を通してみても果して同一特色が見い出されるであらうか。本小稿はこの疑義を前提にして、さきの問題点を考察してみたいと思うのである。

さて、『如浄語録』を通じて如浄禪師その人の風格、乃至接化指導の特色を窺うに、少なくとも次の諸点が見い出されると思われる。すなわち、(1)臨濟禪者としての風格がみられること、(2)嚴格峻厳たる気概の禅僧であつたこと、(3)詩僧としての一面がみられること、(4)エクセントリックな奇矯的言行と共にユーモラスな一面も窺われること、などである。

まづ、(1)の点に関しては、悪拳棒喝の行使・公案の拈提・臨濟諸師との交際の親密さ、などを指摘できる。しかし、これらに関する詳しい論証は伊藤慶道氏の研究に明らかなので今は省略したい。

次に、(2)の点に関しては、例えば、  
破<sub>二</sub>清凉田地、深<sub>二</sub>栽<sub>一</sub>荆棘、遍布<sub>二</sub>痰梨、以<sub>レ</sub>此断<sub>二</sub>臨濟命根、以<sub>レ</sub>此瞎<sub>二</sub>衲僧眼目<sub>一</sub>

とか、あるいは、

爐炭為<sub>レ</sub>床。鑊湯為<sub>レ</sub>座。口吐<sub>二</sub>黑烟。弥天罪過。

などと喝破している上堂語の一言半句、あるいは、「頽然豪爽」の語を当てて評価している『枯崖漫録』の記事から推察されよう。

(3)の点に関しては、例えば、中秋に因んで祖師西来意・本来の面目を説得するに、

十五日己前。湖光激灑晴方好。十五日己後。山色空濛雨益奇。正当十五日。若把西湖比<sub>二</sub>西子<sub>一</sub>。淡粧濃抹總相宜。還有祖師西来意。麼。中秋月以鸞台鏡。贏得多才一首詩。咄

と、蘇東坡の名詩を挿入して上堂しており、また生死の究極的問題を説示するに、孟浩然の詩を用いて、

涅槃堂裡死功夫。風袞葫蘆水上浮。恁麼点<sub>二</sub>開參学眼。釈迦弥勒是他奴。忽有<sub>二</sub>箇漢<sub>一</sub>出来道。争似春眠不覺曉。落花處々聞<sub>二</sub>啼鳥<sub>一</sub>。又且如何。拍<sub>二</sub>禪床<sub>一</sub>云。將謂無人。

と上堂しており、同じような例証を挙げること二、三を下らないばかりか、かえつて、例えば、杜甫の詩を挿入した上堂語、  
綠竹半含籜。序品第一。新梢才出鶻。正宗第二。雨洗娟々淨。風吹細々香。流通第三。淨慈借詩說教。要與衲僧點眼。

あるいは

瞿曇打失眼睛時。雪裡梅花只一枝。而今到處成荆棘。却笑春風綠亂吹。諸方說禪。清凉念詩。還當得麼。其如不然。燒香點燭拜泥團。腦後遼天鷄子飛。

の上堂語にみる如く、如浄禪師自から詩を借り、詩を念じて説教、説禪することを道破していることが知られるのである。加えて、如浄禪師が単なる名詩の鑑賞者にとどまらず、すすんで自からも作詩

に心がけられたことは、例えば、『正法眼蔵』摩訶般若波羅密の中で道元禪師が、これこそ仏祖嬪々の談般若にほかならないと讃嘆されたかの「風鈴の頌」の一篇からも十分に推測されるであろう。かくの如く、如浄禪師が唐詩・宋詩を借りながら仏法の要諦を具体的に説示されていることを知り得たのであるが、そのことは禪師が学人の接化に親切であつたことと共に、詩僧としての一面を持ち併せていたことを推測せしめるに十分である。そして、その点が如浄禪師の上に見い出される背景としては、風光明眉な点で江南随一と賞えられた西湖上の浄慈寺に二度も晋住されたこと、あるいは、南宋時代の詩僧としても著名な無文道璨との親交などが考えられるが、この点に関しては別に論究したいと思う。

(4)の点に関しては中村元博士がすでに指摘されている如くで、達磨の眼睛を扶出し、泥の弾子を作りて人を打つ

とか、あるいは四月八日の浴仏会に際して甘茶を澆ぐことを言うに、悪水を澆ぐなどといつたりしているのである。この一見不可解な点は、如浄禪師の道友呂瀟が、『如浄禪師語録』の序に、

一偈一頌、一話一言、呼風吐雲轟雷掣電。千態萬貌不可窮尽と述べているところである。しかし、この点に加えてさらに奇妙なのは、その反面ユーモラスな一面も窺われるということである。そのことは煎笋上堂語にみられるのである。上堂語の要旨は、典座に見つけ出された竹の子は、ひとたび火勢猛しい釜の中に投げこまれるや、いかに悲痛な叫び声をあげても全身真赤に張れ上るまで煮つめられるものであるという、そのさまをユーモラスにもじって、禪の修行の厳しさを説示されたのである。

ところで、最後に如浄禪師の家風的一端についてさらに言及すれ

如浄語録を通してみた如浄禪師(高橋)

ば、例えば、台州瑞巖寺晋住の際、方丈にあつて、  
飢來喫飯、困來打眠、爐輔亘天、莫有透針錐底上麼。吐。倒  
退三千。

と述べている如く、飢來喫飯・困來打眠する底に求められるのである。しかし、この喫飯と打眠という人間の本能的な営みに対処する最善の方法として、如浄禪師は一見悪辣なる言語と手段の峻厳さ、そして行持の綿密さを重視し、自からも行じまた会下に参する学道者にも要求されたのである。

では、そのような如浄禪師の峻厳さをともなつた家風の性格は、一体誰の下で学び得たものなのであろうか。雪竇の会下で学ばれたものなのか、あるいは松源崇岳など臨濟諸家の脚下で得た所産なのだろうか、これについて、伊藤慶道氏などは、

如浄禪師は、その学人接得の上に於ては多く臨濟の家風に依り、平常の行履に於ては洞上の宗旨を矯伝せられたものと云つてよい。<sup>3)</sup>

と指摘され、臨濟諸師の下での参学によつてはぐまれたものとみておられる。たしかに、かつて如浄禪師も参学し、その錫杖に接したことのある松源崇岳の門庭が峻絶であつたことは、南宋禪林の巨匠と称された癡絶道冲の伝や『蓮菴和尚語録』の記事からも推察されることである。がしかしそれだけを以て、如浄禪師の家風の形成が臨濟諸師によるものとするのは当を得ていないように思われる。

以上、四点から如浄禪師の一面をみてきたのであるが、それぞれに関する詳細な考察は時を改めて検討したいと思う。(註1・3道元禪師研究、第四章、註2東洋人の思惟方法)参照。